

善照寺
寺報

ぜんしゅうじ

第11号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺
電話 四七(三五七)二二三二
FAX 〇四七(三九七)一三三二

暑中お見舞い申し上げます

善照寺住職 今岡達雄

暑中お見舞い申し上げます

東京地域のお盆が過ぎ、来月は行徳地域のお盆です。そろそろ準備に取りかからなくてはと、昨年の記録を見たら、何と昨年(冷夏で「さるすべり(百日紅)」の花がほとんど咲かなかったと書かれていました。写真は本堂の左側にあるピンク色の「さるすべり」です。カラーではないので良くわからないとは思いますが、平年よりも早く咲き始め、今や満開で、まるで大きな「花火」のよう見事に咲いています。

七月二十日は三十九・五度という記録的な暑さになりました

た。これは今まで経験したこと

のない気温でした。今年は6月から暑い日が続いており、梅雨のお湿りもありませんでした。いつもならば東京地域のお盆は「降り出しそうな空とにらめっこ」、降らぬ事もあるし、降ることもあるといった天候なのですが、今年は連日晴天でした。以前から警鐘が鳴らされてきた地球温暖化の影響なのかどうかはわかりませんが、これまで無かったようなことがいろいろ起こる様になると予測している人たちもいるようです。

ともかく、今年は暑い夏です。それも暑い日が長期にわ

たつて続くようです。「たかが天気」と馬鹿にしていると大きな災害に見舞われます。幸いなことに寺のある行徳地域はここ数十年大きな「天災」に遭わずに済んでまいりました。油断大敵この暑さは自然のから警告かもしれませぬね。

法然上人大遠忌

西暦二二二二年は浄土宗をお開きになった法然上人がお亡くなりになった年です。ですから西暦二二二一年は八二二一年忌になります。切りの良い数字である百年忌は百年に一度しかありませんので、西暦二二二一年には盛大な法要を営もうと様々な計画が建てられています。八年後ではありますが今から準備をすすめないといけないこともあるからです。特に総本山知恩院、大本山増上寺をはじめとする七大本山、誕生寺などの特別寺院では伽藍の修復や整備事業が計画されており、寄進の要

請が来ています。

実はあまりに多額なので皆様にはお知らせしていません。現在のところ、なんとか負担が少なくて済むようにと案を巡らせております。しかし、そんなことがあるかもしれないと頭のかたすみに止めて置いて下さい。ひよっとするとこちらは「人災」かも知れませぬね。

(住職記)



住職法話

おせがきの話

我が心を見つめる

お釈迦さまの高弟のひとり、阿難尊者が、まだお弟子入りして間もない頃のこと。ある日の夜更け時、阿難尊者が大樹の下で瞑想をしていると、突如目の前に餓鬼が現れ、「汝の命は残り三日。三日の後に汝はこの世の寿命尽きて餓鬼道に墮ちるであらう」との宣告を受けました。阿難尊者の前に現れた餓鬼。髪を振り乱し、爪は伸び放題。全身や痩せ細りお腹だけがポッコリ出ている。首は針のように細長く、食べ物を食べようとはするが、口の前まで持って来ると、それが炎に変わってしまふ。

今にもはち切れそうな腹は、満ち溢れる「欲」の多さを表しています。振り乱した髪は、人目もはばからず欲を満足させようとする姿。長く鋭い爪は、人を傷つけてでも我が物にしたいという醜い心を表しています。そして細長い喉と、痩せ細った手足は、せっかくの尊い教えも飲み込めず、教えが全く身につかない、そんなことを表現しているのです。つまり、阿難尊者の前に現れた餓鬼とは、ご自身の心の姿そのものだった、ということなのです。



私たちはどうでしょう？ 阿難尊者以上に「欲・貧り」の心に操られて毎日を過ごしているのではないのでしょうか。このまま命を終えれば、阿難尊者が宣告されたと同じように

餓鬼道の世界へ墮ちて何の不思議もない私たちなのです。だからこそ「貧りの心」を少しでも抑え、飢え苦しむ餓鬼たちに飲食の「施し」をしよう。これが「お施餓鬼」の法要なのです。

仏道修行のかなわぬ私

「施し分かち合う心」。社会生活を送るうえでなくてはならないものです。しかし、仏道修行としての「布施行」を行じきれるか、となると、話は少し違ってくる。持っているもの全てを喜んで差し出すのが「布施行」です。しかし実際には、たとえ飴玉一つでも、大事にとっておいた最後の一つだったら「喜んで」という気持ちにならないのが正直なところではないのでしょうか。そう考えると「布施行」を完全に行じることなど到底無理。ましてやすべての修行を極めてさとりに至ることなど、絶対にできない私たちなのです。

私の救われるみ教えは

阿弥陀さまが、まだ法蔵菩薩という菩薩だった時のこと。私たちになり代わってあらゆる修行を積み、長い長い修行の結果、法蔵菩薩は阿弥陀仏という仏となりました。そして積み重ねた功德のすべてを一声のお念仏の中に込めて私たちに示してくださったのです。阿弥陀さまはいまこの時も「南無阿弥陀仏と我が名をとえよ。ひとりも漏らさず極楽へ救おうぞ」と、この世の全ての人に誓い願われているのです。この阿弥陀さまのお誓いを「本願」といいます。

餓鬼道に墮ちて当然のこの私、阿弥陀さまの本願により必ず極楽へ救われる。そう堅く信じて疑いなく、「南無阿弥陀仏」ととなえるほかないのです。私たちが間違いなく救われるみ教えは、お念仏をおいてほかにないのですから。

皆さん、「お施餓鬼」の法要には是非ともご参詣ください。

(かるな 四三号より抜粋)



心は同じ華のうてなぞ

法然上人のお歌

(上人が四国へと流罪になり

帰依者であった九条兼実公

との別れを前にして)

「露の身は

ここかしこにて消えぬとも

心は同じ華の台(うてな)ぞ」

(『勅修御伝』より)



聞くところでは、しきたりにと
らわれないお葬式を希望する方が
増えているそうです。宗教色のな
い「無宗教葬」。お墓を作らない
「散骨」や「樹木葬」。そしてつ
いに「宇宙葬」を手がける企業ま
で登場しました。亡くなられた方
の遺骨をカプセルに詰め、ロケッ
トで宇宙に飛ばすというもので
す。その広告の中で目にしたの
が、次のような体験者の手記でし
た。

亡くなられたその女性は、伊藤
英樹(元検事総長)の著書『人は

死ねばゴミになる』に共感してお
られたそうです。そんな彼女の遺
言は、派手な葬儀や立派なお墓は
一切無用、とのことでした。遺さ
れた夫は、彼女の意志どおりに無
宗教の葬儀を出し、遺骨の一部は
彼女の好きだったヘリ
コプターから散骨しま
した。遺骨の残りは手
元においたそうです。

しかし宇宙葬のこと
を聞いて、彼は思い出
しました。旅好きだっ
た彼女が生前、宇宙旅
行を夢見ていたこと
を。彼はそれを実現す
るため、残りの遺骨を
宇宙葬にしたのでし
た。そして妻を一人に
しないよう、自分も宇
宙葬をしようというのです。

この切実な手記から伝わって
くるのは、亡くなった彼女はけっ
してゴミにならなかつた、とい
うことです。彼女の夫は最大限に
立派な葬儀を出し、最高にぜいた

仏さまからの手紙

くなお墓に彼女を葬りました。
「死んだらゴミになる」という彼
女の信念は、実現されませんでした。
た。真理はむしろ、逆です。
大きな海の水を両手にすくう
と、手の中に小さな海ができま
す。私たちの命は、この小さな海
のようなものだといえます。指の
すきまから水が流れ出れば、手の
中からつぼになり、水は海へと
もどっていくのです。



病気で臨終の床にふせっていた
正如房という高貴な女性が、死ぬ
前に法然上人に一目会いたいと
おっしゃいました。しかし会うこ
とのできなかつた法然上人は、筆
をおとりになりました。

「私もあなたも、少しばかり早い
か遅いか。いずれ果てゆく身で
す。同じ仏の国で再会して、蓮の
花の上で語り合おうではありませ
んか。夢まぼろしのこの世にて、
いま一度会いたいなどと思つて
も、とてもかなわない。その思い

は一筋に捨てて、いつそう深く浄
土を願う心を増し、お念仏にお励
みになって、あちらにて待とうと
お思いください」(『正如房へつ
かわす御文』より)



長年つれそつた妻の遺骨を宇宙
に葬った彼は、大空を見上げるた
びに、そこに彼女がいることを思
い出すことでしょうか。生きてい
る人の方がかえって、去つていつた
人に支えられているのではないで
しょうか。

それに気づかず、死ねばゴミに
なると思うのは、生きる者の傲慢
にちがいありません。その傲慢か
ら、生きることに小さな意味し
か見出せず、苦しい道を歩むので
す。

生きている私たちの人生に最大
の意味を与えるのは、実はすでに
去つていった人たちの世界なの
もしれません。

(副住職)

お寺との付き合い

「お寺との付き合い」は今回で七回目になりました。ここに書いてきたことは「仏事の本来の意義」や「昔から行われてきた習慣」についてまとめたものです。

しかし、そこには寺としての希望が含まれていることも確かです。今回は希望的な部分が多いかも知れません。

施餓鬼(せがき) 供養

お施餓鬼(せがき)は皆様が「布施行」を実行するための法要です。布施行は大変すぐれた修行でありその効力(功德)は大変大きく、その功德を先祖代々や先亡諸霊、あるいは新盆霊位の供養のために使うことが出来るのです。

善照寺では昔から八月十七日に施餓鬼を行っております。これはお盆とは別に施餓鬼供養を

行い、その効用によって先祖や新亡諸霊の供養を行おうとするものです。

重ねて申し上げますが「お盆」と「施餓鬼」は別の供養です。ですから、東京の寺院では、最近になって年中行事の少ない五月とか六月に施餓鬼法要が行われるようになっていきます。つまり、時期的に近いと一体となった法要であると思われる、お盆にはお参りするが、施餓鬼には行かないといったことになってしまっています。

実際、施餓鬼を五・六月にした東京の寺院では、盛夏に行っていたお盆・施餓鬼の時に比べて施餓鬼への参加者が増えたそうです。つまり、時期が近いので二回出かけるところを一回にまとめてお参りしていたということでしょう。

お盆の後の盛夏に行われる施餓鬼は、その暑さ、蝉の声など独特の雰囲気があります。捨てがたいものがあります。ですから善照

寺ではここ当分「施餓鬼」の時期を動かそうとは思いませんが、皆様も兼用でなく是非とも「おせがき」にご参加下さい。

施餓鬼(せがき)への参加

「おせがき」は餓鬼供養のための法要で、布施行が基本です。皆様方から布施された供養料で多くの僧侶を呼び、餓鬼供養の特別祭壇を作り餓鬼に食べ物を布施します。これに併せてお塔婆をあげ先祖や先亡諸霊に功德を振り向ける供養を行います。新亡の霊がある方は特別に供物を布施する布施行を行います。その功德を新亡の霊に振り向けるのです。

お塔婆の申込みは遅くとも十日までにお願います。お塔婆は一基四千円です。これとは別に施餓鬼供養のためのお布施を包んで下さい。平均五千円程度のようです。「お布施」あるいは「施餓鬼供養料」とお書きになって下さい。(合掌)

編集後記

ただ今、子育て中の私ではありますが、少しの空き時間を見つけては、つつい自分の趣味に高じてしまい、楽しみであるはずのことが、かえって疲れてしまうことがしばしばです。お釈迦様が悟りをひらく以前、徹底した苦行をしていたころ、ヒンドウの神イन्द्रが舞いおりて、楽器で美しい響きを奏でました。「ほどよく張った弦は、このような音色を奏でることが出来る。しかしゆるんだ弦は何の音も出さず、張りすぎた弦は切れてしまう。」その言葉を聞き、極端にかたよらない中道にこそ真理があるのではないかと考えたそうです。なるほどとは思いますが、そう簡単なことではありません。皆様も暑い夏、ついイライラしてしまうこともあるかと思いますが、頭の片隅にでも「中道」をおいて、元気に夏を乗り切りたいものですね。

合掌(副住職室 久美英)